

北極の旅

江本 嘉伸

北極が無毛の土地と考えるのは、ばかげた幻想だ。タイガには白黒トウヒ、シヤック・バイン（松の一種）、から松、かばの木、ポプラなどが生い繁っている。北方に行くほど、樹木はまばらになり、背も低くなる。巨大なツンドラ平原では、棒切れのような小さい木が生えているだけだ。

しかし森林地帯と無毛地帯とは、巨大な手と手をからませたように重なり合っている。森林の奥深くにツンドラ地帯が点在していたり、ツンドラの大平原の果てに樹木がオアシスのように繁っている、

という具合だ。

ツンドラも、種類だけではない。山の高い斜面には高山ツンドラ、タイガの周縁には灌木ツンドラ、北にはすげツンドラ、さらに北方になるとこげや地衣類のツンドラ、極北の島々には丘原ツンドラ、というように分けられる。丘原ツンドラでは、凍りついた北極の氷に囲まれたさい果ての島々にどうにか根をおろそうと、植物がはいつくばるようにならしている。

夏になると、ツンドラ地帯は、いろいろな種類の花があたり一面に咲き乱れる。大体背は低い、数限りなくあるので色

オオカミを見たい。そう思ったのは、レゾリュート・ベイにある航空会社の宿舎で、一枚のカラー写真を目にしてからである。

海に近い雪の平原を、一頭の白いオオカミが横切ろうとしている風景であった。あたりには、他に生き物の気配はない。枯れ枝が所々つき出ているだけの白い荒野を、オオカミはやや前かがみの姿勢で、海に向かって進んでいるのだった。

北極の自然の中で、野生の姿のままのオオカミを、私はどうしても見たいと思った。三月中旬、日本人による初の北極点到達の試みを取材するため、カナダの果ての島、コーンウォーリス島（レゾリュートの所在地）に滞在していた時のことである。

それから一か月半が過ぎた五月はじめ、冷えきったDC3型機の機内に、サブザックをひっかけて私は乗りこんだ。北極点取材が終わり、レゾリュートに戻った直後である。エルズメア島中部のユー

とりどりの花が何百平方キロも埋めつくしてしまう。それがいわば小人国のジャングルようになって、クモやマルハナバチ、小さくて優雅な蝶、それに蝶などが飛び回る。飛び回っているのはそれだけではなく、ぶゆや蚊も沢山いるが……。

鳥は大体どこでも何羽となく見られるし、いろいろな種類の哺乳類動物もいて、一帯を占拠している。ツンドラには、ずんぐり、でぶでぶのレミング（ねずみに似た動物）や毛むくじやらのじやこう牛、タイガには、ちっほけなトガリネズミもおればでっかい大ジカもいる、というよ

レカ測候所まで航空ガソリンを運ぶフライトに便乗させてもらったのだ。取材の現場では、ついに見ることのできなかった、生きたオオカミを、この機会に一目見たいという気持があった。

北緯八十度に位置するユーレカ測候所は、フィヨルドのそばの、広々とした台地に、しっかりとつくりで、建てられていた。十二人の若い男たちが六か月交代で、単調だが厳しい観測作業を続けている。建物の中はシヤック一枚で過ごせる暖かさで、食堂も、個室も、考えていた以上に立派であった。測候所の近くに航空会社の事務所などいくつかの建物はあ



氷点下42度のへくクラ岬に立つ江本氏。イグルーの保温性の良さと堅牢さには感心した。

うに多彩だ。

海は何種類かのクジラ、アザラシ、太ったセイウチ、図体の大きい白グマの住みかになっている。海も、内陸に無数にある湖水も、魚の宝庫だ。

北方は、見る目をもった人にとっては生き生きと、活力にあふれている。昔々、はるか時代をへだてた別の人種はこの真実を認識し、北方一帯を「わが故郷」と呼ぶようになった。（フアーリー・モーワット著「Canada North Now: The Great Betrayal」より引用。© 1976 by McClelland and Stewart Ltd.）

コーヒーを飲みながら、観測員たちと語りあった後、私はひかえ目に切り出した。実は、もし可能ならオオカミを見たくてなまならないのだが……。

リックという名の二十八オのマナーシヤヤーが、二つ返事で案内を買って出てくれた。オオカミなら、ここいらには、いくらでもいる。ただ、たつたいま、近く